

ラブラン僧院の般若学研究

才華加

1 はじめに

ラブラン・タシキル (Bla brang bkra shis 'khyil, 以下「ラブラン僧院」) は、ゲルク派の学僧ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドウ ('Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus: 1648–1721/22)¹ によって東チベットのアムド地方に設立された学問寺²である。

中央チベットのデブン僧院ゴマン学堂 ('Bras spungs sgo mang) の学堂長を 1700 年から 1707 まで務めた後、故郷のアムド地方に戻って 1709 年にラブラン僧院を設立したジャムヤンシェーパは、1707 年から 1718 年までの間に般若学のための教本を著作し、デブン僧院ゴマン学堂およびラブラン僧院における般若学研究の礎を築いた。ゴマン学堂やラブラン僧院では、現代に至るまで、ジャムヤンシェーパの般若学教本が後代の学者によって著された註釈や副読書と共に学ばれている。本稿では、ラブラン僧院の寺史や『ドメー仏教史』(Mdo smad chos 'byung) などの資料に基づき、ラブラン僧院における般若学研究の成立とその実態を明らかにする。

2 ジャムヤンシェーパ略年譜

『ジャムヤンシェーパ伝』(Kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa'i rnam thar) の記述に依拠して、ジャムヤンシェーパの主な事績を以下に示す。

西暦	年	事績
1648 年	1 歳	アムド地方のタンラン (Rting ring) に生まれる。
1652 年	5 歳	ダライ・ラマ五世ガワン・ロサン・ギャンツォより手灌頂を授かる。
1660 年	13 歳	ドゥルジン・イシ・ギャンツォより沙弥戒を授かる。
1668 年	21 歳	中央チベットへ行く。ゴマン学堂に入り、チャンキヤー一世ガワン・ロサン・チューデン (Ngag dbang blo bzang chos ldan) に師事する。
1673 年	26 歳	サンブ・ネウトク (Gsang phu ne'u thog) 僧院にて問答を行ない、「ラブジャムマワ」(rab 'byams smra ba) の称号を授かる。
1674 年	27 歳	ポタラ宮においてダライ・ラマ五世ガワン・ロサン・ギャンツォより具足戒を授かり、戒名を「ガワン・ツォンドウ」と改める。
1676 年	29 歳	ギュメ密教学堂にてロドゥ・ギヤムツォ (Blo gros rgya mtsho) に師事し、密教を学ぶ。
1680 年	33 歳	デブン僧院の裏山のゲペル (Dge 'phel) 山にて講義・著作を行なう。
1685 年	38 歳	ゲペル山にて『了義未了義考究』(Drang nges rnam 'byed kyi mtha' dpyod) を著作する。
1687 年	40 歳	ゲペル山にて『静慮無色定大論』(Bsam gzugs chen mo) を著作する。
1689 年	42 歳	ゲペル山にて『学説綱要本頌』(Grub mtha' rtsa ba) を著作し、その自註『学説大論』(Grub mtha' chen mo) の著作を開始する。
1695 年	48 歳	『入中論考究』(Dbu ma la 'jug pa'i mtha' dpyod) を著作する。

¹ ジャムヤンシェーパの没年は、クンチョク・ジクメ・ワンポの『シャムヤンシェーパ伝』やタクゴンパの『ドメー仏教史』(Mdo smad chos 'byung) によれば 1721 年である。トゥンカル・ロサン・ティンレーの『トゥンカル大辞典』(Dung dkar tshig mdzod chen mo) は 1722 年を没年とする。

² ゲルク派の学問寺では、各僧院によって定められる教本 (yig cha) に基づいて顕教および密教が学習され、その内、顕教に関しては、認識論・般若学・中観学・俱舍学・律学の五大学科 (gzhung bka' pod lnga) を中心とした約 15 年にわたる教育が実施される (ツルティム 1979: 68–73, 小野田 1989: 364–368, Dreyfus 2003: 111–118)。

1699年	52歳	『学説大論』（ <i>Grub mtha' chen mo</i> ）を完成させる。
1700年	53歳	ダライ・ラマ六世ツァンヤン・ギャンツォの命を受け、ゴマン学堂の学堂長を務める（1707年まで）。
1707年	60歳	『般若波羅蜜多考究』（ <i>Phar phyin gyi mtha' dpyod</i> ）の著作を開始する（1718年に完成）。
1709年	62歳	東チベットに戻り、ラブラン僧院を建立する。
1721/22年	74/75歳	入滅する。

3 ラブラン僧院の教学

ラブラン僧院はジャムヤンシェーパによって1709年に建立された学問寺であり、ゲルク派の六大僧院の一つに数えられる名刹である。ラブラン僧院の教育課程などを定める学則には、当然ながら創立者であるジャムヤンシェーパ自身の考えが反映されているであろう。タクゴンパ・クンチョク・テンパ・ラプギェ（Brag dgon pa dkon mchog bstan pa rab rgyas: 1801–1866）によって著された『ドメー仏教史』（*Mdo smad chos 'byung*）に以下のように記述されている。

tshogs chen gyi 'grig lam 'bras spungs | chos grwa'i skor sgo mang ltar byed rgyu'i bkod khyab dang | chos grwar rje nyid nas brtsi bzhag gngang | (*Mdo smad chos 'byung* 366.21)

〔ラブラン僧院の〕大集会（tshogs chen）³の規則はデプン〔僧院に準ずる。〕チュラ（chos grwa, 法苑）⁴に関して〔ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドウ師は〕ゴマン学堂と同じように実施するようにとの指示をなさり、チュラにおいては、尊者（ジャムヤンシェーパ）ご自身が〔監督者として〕暗記試験（rtsi bzhag）を実施した。

この記述によると、ラブラン僧院の大集会においてはデプン僧院と同じ規則が適用され、学習カリキュラムについてはデプン僧院ゴマン学堂と同じものが実施される⁵

ラブラン僧院は、トゥーサムリン（thos bsam gling）学堂、ギユメ（rgyud smad）学堂、チューコルリン（chos 'khor gling）学堂、メンパ（sman pa）学堂、キェドル（kye rdor）学堂、ギユトウ（rgyud smad）学堂の六学堂からなる。これらの内、顕教の五大学科の教育を担うのは、ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドウによって創立されたトゥーサムリン学堂である。この学堂の教育課程については『ラブラン僧院略史』（*Bla brang dgon pa'i lo rgyus mdor bsdus*）に以下のように記述されている。

'dzin grwa bcu gsum ste | kha dog dkar dmar dang | kha dog gong | bsdus 'bring | bsdus chen te 'dzin grwa bzhis tshad ma rnam 'grel gyi dgongs don las btus pa'i bsdus tshan nyer lnga dang | rtags rigs 'dzin grwas rgyan 'jug gnyis dang mdo gdugs kyi rgyugs sprad thog blo rtags gnyis dang don bdun cu | gzhung gsar | gzhung gong | skabs dang po | skabs bzhi ba ste 'dzin grwa bzhis | phar phyin skabs brgyad ka zur bkol bzhi | dbu ma gsar rnying gi 'dzin grwa gnyis kyi dbu ma'i gzhung

³大集会（tshogs chen）はラブラン僧院に属する全学堂の僧侶によって行なわれる法要である。

⁴問答修行を行なうチュラ（chos grwa）はそれぞれの学堂ごとに実施される。

⁵デプン僧院は1416年に、ツォンカパの直弟子の一人であるジャムヤンチュージェ・タシペルデン（'Jam dbyangs chos rje bra shis dpal ldan: 1379–1449）によって建立された。ジャムヤンチュージェ・タシペルデンが育成した七人の優れた弟子達によって、ゴマン（sgo mang）学堂、ロセリン（blo gsal gling）学堂、デヤン（bde yang）学堂、ドウルワ（'dul ba）学堂、ガクパ（sngags pa）学堂、ギューパ（rgyas pa）学堂、シャクコル（shag skor）学堂が設立された。これらは後にゴマン、ロセリン、デヤン、ガクパの四学堂に統合される。ゴマン学堂の創始者はトゥン・タクパ・リンチェン（Dung grags pa rin chen, 生没年不明）である。ゴマン学堂を代表する学者としてジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドウや、チャンキャ・ロールペードルジェ（Lcang skya rol pa'i rdo rje: 1717–1786）などがある（西沢 2011: 519）。

yongs rdzogs | mdzod 'dzin grwas mdzod gnas brgyad ka dka' rams 'dzin grwas 'dul ba gzhi bcu bdun dang rnam 'byed cha lag dang bcas pa la rtsod pa brdar sha chod pa byas te lo bco lnga'i ring la bka' pod lnga'i tshig don ma lus khong du chud pa byed dgos shing | (*Bla brang dgon pa'i lo rgyus mdor bsdus* 188.12–189.6)

十三の学級がある。[1] カトクカルマル、[2] カトクコン、[3] ドウディン、[4] ドウチェンの四学級では〔ダルマキールティ作〕『量評釈』(*Tshad ma rnam 'grel, *Pramāṇavārttika*) の思想内容から抽出した二十五の論題集成〔について論議・考究を行なう。〕[5] ターリク学級では『現観莊嚴論』『入中論』『白傘蓋陀羅尼經』の〔暗記〕試験を受けた上で、認識論・論理学の二つと七十義〔について論議・考究を行なう。〕[6] シュンサル、[7] シュンコン、[8] カプタンポ、[9] カプシーパの四学級では、般若波羅蜜多（『現観莊嚴論』）全八章と四つの附論〔について論議・考究を行なう。〕[10] ウサルと[11] ウニンの二学級では、中観（『入中論』）の論書全体〔について論議・考究を行なう。〕[12] ズー学級では、『俱舍論』全八品〔を学ぶ。〕[13] カーラム (*dka' rams > bka' rams*)⁶学級では、『律本事』の十七項目と『律分別』の各要素について論議・考究を行なう。十五年かけて五大典籍の語義を全て理解するようにしなければならない。

ラブラン僧院トゥーサムリン学堂では、顕教の柱となる五大学科を学習するために十三の学級が組まれている。それらを上記の記述に従って順に述べると次の通りである。

- a. 認識論基礎を学習するために組まれた四学級
 1. カトクカルマル (*kha dog dkar dmar* 「白色と赤色」) 学級
 2. カトクコン (*kha dog gong* 「白色上級」) 学級
 3. ドウディン (*bsdus 'bring* 「論題集成中級」) 学級
 4. ドウチェン (*bsdus chen* 「論題集成上級」) 学級
- b. 認識論・論理学基礎と般若学基礎を学習するために組まれた二学級
 5. ターリク (*rtags rigs* 「証相類型学」) 学級
- c. 般若学を学習するために組まれた四学級
 6. シュンサル (*gzhung gsar* 「初級学理」) 学級
 7. シュンコン (*gzhung gong* 「上級学理」) 学級
 8. カプタンポ (*skabs dang po* 「第一章」) 学級
 9. カプシーパ (*skabs bzhi pa* 「第四章」) 学級
- d. 中観学を学習するために組まれた二学級
 10. ウサル (*dbu gsar* 「中観初級」) 学級
 11. ウニン (*dbu rnying* 「中観上級」) 学級
- e. 俱舍学を学習するために組まれた学級
 12. ズー (*mdzod* 「俱舍」) 学級
- f. 律学を学習するために組まれた学級
 13. カーラム (*bka' rams*) 学級

これらの内、般若学課程は、シュンサル（初級学理）学級、シュンコン（上級学理）学級、カプタンポ（第一章）学級、カプシーパ（第四章）学級の四つで構成される。それぞれに最低で一年を要するので、般若学は最低四年かけて学習される。

般若学課程で研究対象とする典籍は、マイトレーヤ (*Maitreya*) 作として伝えられる般若経綱要書『現観莊嚴論』(*Abhisamayālamkāra*) とハリバドラ (*Haribhadra*: ca. 730–95) の註釈『現観莊嚴

⁶ 『藏漢大辞典』(*Bod rgya tshig mdzod chen mo*, s.v. *bka' rams pa*) によれば、*bka' rams pa* は *bka' rab 'byams pa* の省略形であり、無辺の仏説に通暁する学者 (*gsung rab mtha' yas pa shes pa'i mkhas pa*) を意味する。

論註』（*Abhisamayālaṅkāra*）⁷である。これらを研究するために主として学ばれるのがジャムヤンシェーパの教本『般若波羅蜜多考究』（*Phar phyin gyi mtha' dpyod*）⁸である。「般若波羅蜜多考究」が立脚するツォンカパ・ロサンタクパ（Tsong kha pa blo bzang grags pa: 1357–1419）の註釈『善説金蔓』（*Legs bshad gser phreng*）も講義され、問答修行において議論の対象となる。

さらに、副読本としてギャルツァプジェ・タルマリンチェン（Rgyal tshab dar ma rin chen: 1364–1432）の『釈論真髓』（*Rnam bshad snying po rgyan*）、ケードゥップジェ・ゲレクペルサンポ（Mkhas grub rje dge legs dpal bzang po: 1385–1438）の『難解釈光明論』（*Rtogs dka'i snang ba*）、クンタン・テンペドゥンメ（Gung thang bstan pa'i sgron me: 1762–1823）の『割註』（*Mchan 'grel*）などが参照される。

4 ジャムヤンシェーパの般若学教本

4.1 般若学教本（yig cha）の著作過程

クンチョク・ジクメ・ワンポ（Dkon mchog 'jigs med dbang po: 1728–1791）によって著された『ジャムヤンシェーパ伝』によれば、ジャムヤンシェーパは1669年（22歳）の時に、デプン僧院ゴマン学堂の般若学課程シュンサル（初級学理）学級に入門し、チャンキャ二世ガワン・ロサン・チューデン（Lcang skya blo bzang chos ldan: 1642–1714）の下ではじめて般若学を学んだ。1670年（23歳）の時にカプタンポ（第一章）学級に進学し、ギャルツァプジェの『釈論真髓』第一章を暗記するまで学習し、同時に四つの副講座（zur bkol bzhi）⁹を修得した。1671年（24歳）の時にカプシーパ（第四章）学級に進学し、ハリバドラの『現観莊嚴論註』、ツォンカパの『善説金蔓』のギャルツァプジェの『釈論真髓』の難所、ツォンカパの『善説真髓』（*Legs bshad snying po*）の「唯識派」節から「自立論証派」節までの箇所を暗記するまで熱心に学んだ¹⁰。

さらに、伝記によると、ジャムヤンシェーパは1670年（23歳）の時からゴマン学堂で教鞭を執るようになり¹¹、1701年（54歳）の頃より般若学を講義している。彼が自らの手で僧院教本（yig cha）を著作するようになった経緯については、同書に以下のような記述がある。

kham tshan so so'i grwa ryan rnam kyis kha btags maṅḍal bcas 'bul tshan phul te grwa tshang rang gi rtsi bzhag la gtong rgyu'i ched du | 'dul mdzod phar phyin dang bcas pa'i yig cha bka' rtsom mdzad dgos zhes mgrin gcig tu chos grwar gsol ba btab pas zhal gyis bzhes te | 'dul mdzod kyi mtha' dpyod chen mo gnyis rtsom pa'i dbu tshugs shing brtsams tshar rim nas rtsi bzhag la gngang | (*Kun mkhyen rnam thar* 98.11–16)

各学寮の年長の僧侶達がカター（kha btags）¹²や曼荼羅といった贈物を〔ジャムヤンシェーパに〕贈り、「我々の学堂の暗記試験（rtsi bzhag）の課題用として、律・俱舍・般若学の教本（yig cha）を著作して頂きたい」と、チュラ（法苑）の中で一同に請願を申し上げた。〔ジャムヤン

⁷チベットの伝統では、同書は一般に'grel ba don gsal「明瞭義釈」と呼ばれる。チベットにおける『現観莊嚴論』研究の多くはこの註釈に立脚している。

⁸この作品は後述するように章ごとに異なった題目を有する。「般若波羅蜜多考究」（*phar phyin gyi mtha' dpyod*）は『般若波羅蜜多考究・如意宝蔓・有缘者開眼』と題される最終章にある名称である。ここでは、ジャムヤンシェーパによって著された般若学教本の全体を指す名称として便宜的に用いる。

⁹四つの副講座（zur bkol bzhi）とは『現観莊嚴論』及び『現観莊嚴論註』に説かれる四つの項目、すなわち、[1] 二十僧伽（dge 'dun nyi shu）、[2] 静慮・無色定（bsam gzugs）、[3] アーラヤ識（kun gzhi）、[4] 十二支縁起（rten 'brel）について個別に研究するための課程を指す。

¹⁰*Kun mkhyen rnam thar* 27.8–30.3 を参照。

¹¹*Sgo mang chos 'byung* 66.11–15 を参照。

¹²チベットで尊敬の印として人に贈る带状の絹布。

シェーパは）それに応じ、律学と俱舎学の考究大論の著作を開始し、出来次第、暗記試験に〔課題として〕出した。

ジャムヤンシェーパは1701年（54歳）¹³の時から、デブン僧院ゴマン学堂の僧侶の要請に応じて、従来用いられていたクンル・チューキ・チュンネ（Gung ru chos kyi 'byung gnas: 16–17世紀）の旧教本（yig cha rnying pa）¹⁴に代わる新たな教本を次々に著作し始めた。最初に完成したのが律学と俱舎学の考究大論（mtha' dpyod）であり、次に着手されたのが般若学の考究である¹⁵。

般若学の教本として著作された「般若波羅蜜多考究」全八章は段階的に成立したものであり、第一章、第二～三章、第四～八章にそれぞれ異なった題目が与えられている。法身論を論じる第八章については、二種の異なった教本が作成されている。それぞれの題目を以下に示す。

- 第一章： *Bstan bcos mngon par rtogs pa'i rgyan gyi mtha' dpyod shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i don kun gsal ba'i rin chen sgron me* 『現観莊嚴論考究・般若波羅蜜多の一切義を明かす宝灯』
- 第二～三章： *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mtha' dpyod nor bu'i 'phreng mdzes mkhas pa'i mgul rgyan* 『般若波羅蜜多考究・宝蔓論・学者の首飾り』
- 第四～八章： *Shes rab kyi pha rol tu phyin pa'i mtha' dpyod 'khrul sel gang gā'i chu rgyun mi pham zhal lung* 『般若波羅蜜多考究・邪説を排除するガンジス河の水流・アジタの口伝』
- 第八章（異本）： *Phar phyin gyi mtha' dpyod bsam 'phel yid bzhin nor bu'i 'phreng mdzes skal bzang mig 'byed* 『般若波羅蜜多考究・如意宝蔓・有縁者開眼』

これらの一連の文献の著作経緯と完成年については、『如意宝蔓・有縁者開眼』の奥書に以下のように記されている。

phar phyin gyi mtha' dpyod bsam 'phel yid bzhin nor bu'i 'phreng mdzes skal bzang mig 'byed ces bya ba 'di ni gangs can gyi phyag na pad dkar 'chang bas bka' stsal gyi me tog yang gnang zhing | [...] khyad par mang thos mdo sngags smra ba'i dbang po dpon slob gu na ma ti dang | rang gi grwa rgan bla ma sngags rams pa dpal 'bar gnyis kyis lam rim mchod rten maṇḍal che legs 'bul tshan dang bcas te bskul ba'i ngor bkra shis sgo mang nas dbu btsugs | skabs lnga pa yan grub cing | rgyal bas lung bstan pa'i chos grwa chen po bkra shis 'khyil du rdzogs pa'i sangs rgyas zil gnon me rtar sku bltams nas lo nyis stong drug brgya dang so gsum | sangs rgyas shing chos 'khor bskor nas nyis stong lnga brgya dang go brgyad lon pa rnam 'phyang zhes pa sa pho khyi'i lo mgo zla ba'i lnga mchod chen po'i dus su | shākya'i dge slong mang thos 'jam dbyangs bzhad pa'i rdo rjes sbyar ba 'dis kyang rgyal ba'i bstan pa phyogs dus kun tu dar zhing rgyas par gyur cig | (*Skal bzang mig 'byed* 67b3–68a3)

¹³年代は *Kun mkhyen rnam thar* 97.2–98.21 による。

¹⁴クンル・チューキ・チュンネの生涯と著作については Yi 2016: 31–45 を参照。Yi 2016: 43–44 によれば、般若学に関しては『般若波羅蜜多全八章の考究』（*Phar phyin skabs brgyad kyi mtha' dpyod*）（481 フォリオ）という教本を著している。なお、4.3 で述べるように、クンル・チューキ・チュンネが著した『二十僧伽論』は、ジャムヤンシェーパの登場以後も、ゴマン学堂やラブラン僧院で教本として用いられる。

¹⁵他の多くの学堂では、梗概のみを纏めた「略義」（*spyi don*）と詳細な議論を含む「考究」（*mtha' dpyod*）という二種の教本が用いられる。例えばデブン僧院ロセリン学堂で学ばれるパンチェン・ソナム・タクパ（*Pañ chen bsod nams grags pa*: 1478–1554）の般若学教本は、「略義」に相当する『仏母経の義を明かす灯火』（*Yum don gsal ba'i sgron me*）と、「考究」に相当する『仏母経の義をさらに明かす灯火』（*Yum don yang gsal sgron me*）の二つからなる。しかし、ジャムヤンシェーパの教本は「略義」を含まず、「考究」のみで構成される。

本書『般若波羅蜜多考究・如意宝蔓・有縁者開眼』は、雪国（チベット）の観自在菩薩（「白蓮華を手を持つ者」）¹⁶からご指示という花を与えられ [... 中略...] 特に、多聞にして顕密を語る自在者であられる師弟、軌範師グナマティ（*Gu na ma ti > Guṇamati*）と〔ジャムヤンシェーパ〕ご自身の師匠にあたる年長の僧侶ラマ・ガクラムパ・ペルバル（*Bla ma sngags rams pa dpal 'bar*）の兩人により、道次第〔の経本〕、仏塔、曼荼羅といった上等の贈物と共に委託されたことに応じて、タシ・ゴマン学堂にて著作が開始されたものである。第五章までは〔ゴマン学堂において〕完成した。〔第五章以降は〕勝者によって予言された大僧院ラブラン・タシキル（*bla brang bkra shis 'khyil*）において、正等覚者（釈尊）が丙午年に誕生してから2633年後、正等覚を得て法輪を転じてから2598年後にあたる戊戌年の大五供節（*Inga mchod chen po*）の時に、釈迦〔牟尼〕の多聞の比丘ジャムヤンシェーパによって著作された。この著作によって勝者の教えがあらゆる時代と地域に広まり、栄えますように。

ジャムヤンシェーパはダライ・ラマ五世やゴマン学堂の年長の僧侶達からの指示を受けて『般若波羅蜜多考究』の著作を開始した。この奥書によると、全八章の内、第一章から第五章までをデプン僧院ゴマン学堂にいた頃に完成させ、第五章から第八章は東チベットに戻ってラブラン僧院を建立した1709年より後に著作したことになる。しかし、ガワン・ゲレク（*Ngag dbang dge legs: ca. 18世紀*）の『ジャムヤンシェーパ略伝』（*Rnam thar snying bsdus*）によれば、第一章と第四章の完成は1707年（60歳）¹⁷、第二章・第三章の完成年は1713年（66歳）¹⁸、すなわちジャムヤンシェーパが既に東チベットに戻っている時期に著作されたという。さらに、ゴマン学堂の学堂長とデプン僧院座主を務めたテンパ・テンジン（*Bstan pa bstan 'dzin: 1917–2007*）の『ゴマン学堂史』（*Sgo mang chos 'byung*）によれば、第一章と第四章の完成は1708年（61歳）であり、第二章・第三章の完成年は『ジャムヤンシェーパ略伝』と同じく1713年であるという¹⁹。

『般若波羅蜜多考究』全体の完成年は、上に引用した奥書の記述が示すように「正等覚者（釈尊）が丙午年に誕生してから2633年後、正等覚を得て法輪を転じてから2598年後」であり、これは1718年に相当する。「大五供節」（*Inga mchod chen po*）の時期に完成したということは、この年の10月（チベット暦）の完成を意味する。

4.2 「般若波羅蜜多考究」の註釈文献

ジャムヤンシェーパの『般若波羅蜜多考究』に関しては、以下に示す註釈書と関連文献が書かれている。

1. *Phar phyin skabs dang po'i mchan 'grel rtsom 'phro*
『般若波羅蜜多〔考究〕第一章割註〔未完〕』（クンタン・テンペードウンメ）
2. *Skabs bzhi pa'i bsdus don rgyal mkhan po grags pa rgyal mtshan la gngang ba*
『ギェル・ケンポ・タクパ・ギェルツェンに贈る第四章綱要』（クンタン・テンペードウンメ）
3. *Phar phyin skabs bzhi pa'i bsdus don gyi 'grel pa blo gsal mgrin rgyan skal bzang re ba kun skong*
『般若波羅蜜多〔考究〕第四章綱要釈・有縁者の一切の願を満たす智者の首飾り』（クンタン・ロドゥ・ギヤムツォ）
4. *Kun mkhyen 'jam dbyangs bzhad pa'i phar phyin yig cha'i mchan 'grel gser gyi lde mig*
『クンケン・ジャムヤンシェーパ般若波羅蜜多教本割註・金の鍵』（ハルハ・チューゼ・ラマ）

¹⁶ダライ・ラマ五世ガワン・ロサン・ギャンツォを指す。

¹⁷*Rnam thar snying bsdus* 50.12 を参照。

¹⁸*Rnam thar snying bsdus* 57.4–58.7 を参照。

¹⁹*Sgo mang chos 'byung* 80.15 を参照。

これらは現在に至るまで、ラブラン僧院やデプン僧院ゴマン学堂などで、ジャムヤンシェーパの教本を読解するための副読本として学ばれる文献である。

1はラブラン僧院の学僧クタン・テンペードウンメによって書かれた未完の割註（mchan）である。奥書はなく、著作年は不明である。『般若波羅蜜多考究』第一章に現れる重要な概念や引用される経典・論書などについて、詳細な情報を与える。『現観莊嚴論』第1章43詩節に説かれる被鎧行（go sgrub, *sannāhapratipatti）までの内容を扱っている。

2は1と同じくクタン・テンペードウンメの著作である。ジャムヤンシェーパ作『般若波羅蜜多考究』第四章の綱要（bsdus don）をまとめる韻文（tshigs bcad）形式の作品である。奥書によると、デプン僧院ゴマン学堂での学習を終えたクタン・テンペードウンメが1787年（25歳）、東チベットに戻る前に、ギェル・ケンポ・タクパ・ギェルツェン（Rgyal mkhan po grags pa rgyal mtshan: 1762–1835/38）の請願により著作したものである。

3はラブラン僧院の学者クタン・ロドゥ・ギャムツォ（Gung thang blo gros rgya mtsho: 1851–1928/30）によって著された2に対する註釈書である。奥書によると、本書はグルダルマ（Gu ru dharma）、チャムパ（Byams pa）、ティンレー・ギャンツォ（'Phrin las rgya mtsho）の三名の請願により、1914年に著作されたものである。

4はモンゴル出身の学者ハルハ・チューゼ・ラマ・テンペードウンメ（Hal ha chos mdzad bla ma bstan pa'i sgron me: 18–19世紀）によって書かれた『般若波羅蜜多考究』全八章に対する割註である。ハルハ・チューゼ・ラマはセラ僧院チェ学堂（Ser byes）のロンドルラマ・ガワン・ロサン（Klong rdol bla ma ngag dbang blo bzang: 1719–1794）に師事した後、同じくモンゴル出身のテンダル・ララムパ（Bstan dar lha rams pa: 1759–1831）と共にゴマン学堂で学び、デプン大集会堂のチューゼ（chos mdzad）を最初に務めたことで知られる人物である²⁰。本書は1と同じく割註の形式で書かれており、『般若波羅蜜多考究』に現れる重要な概念や引用される経典・論書などについて、詳細な情報を与えるものである。

4.3 ラブラン僧院の四副講座と教本

最後にラブラン僧院の四副講座（zur bkol bzhi）で用いる教本について触れておく。四副講座とは『現観莊嚴論』及び『現観莊嚴論註』に説かれる四つの項目、すなわち、[1] 二十僧伽（dge 'dun nyi shu）、[2] 静慮・無色定（bsam gzugs）、[3] アーラヤ識（kun gzhi）、[4] 十二支縁起（rten 'brel）について個別的に研究するための課程である。ラブラン僧院における四副講座の学習方法は、デプン僧院ゴマン学堂のそれと同じであり、四副講座の内容を以下に示す文献に基づいて学ぶ。

1. 二十僧伽（dge 'dun nyi shu）

– *Dge 'dun nyi shu'i rnam gzhag blo gsal bung ba'i dga' ston*

『二十僧伽論・明晰な智慧ある蜜蜂の饗宴』（クンル・チューキ・チュンネ）

2. 静慮・無色定（bsam gzugs）

– *Bsam gzugs kyi snyoms 'jug rnam par bzhag pa'i bstan bcos thub bstan mdzes rgyan lung dang rigs pa'i rgya mtsho skal bzang dga' byed*

『静慮無色定の等至を規定する論書・牟尼の教えを美しく飾り有縁者に喜びをもたらす聖言と正理の大海』（ジャムヤンシェーパ・ガワン・ツォンドゥ）

– *Bsam gzugs chen mo las mdor bsdus te bkod pa bsam gzugs kyi rnam gzhag legs bshad bum bzang*

『静慮無色定大論を要約して提示する静慮無色定の規定・善説の瓶』（クンチョク・ジクメ・ワンポ）

²⁰Sgo mang chos 'byung 449.7–450.11 を参照。

3. アーラヤ識 (kun gzhi)

- *Yid dang kun gzhi'i dka' gnas rnam par bshad pa mkhas pa'i 'jug ngogs*
『染汚意・アーラヤ識論の難所の解明・智者入門』（クンタン・テンペードウンメ）

4. 十二支縁起 (rten 'brel)

- *Rten 'brel gyi rnam gzhas lung rigs bang mdzod*
『十二支縁起論・聖言と論理の蔵』（クンタン・テンペードウンメ）

二十僧伽については、ジャムヤンシェーパは独自の教本を著しておらず、クンル・チューキ・チュンネの旧教本がそのまま採用されている。ラブラン僧院の学者セー・ガワン・タシ (Sras ngag dbang bkra shis: 1678–1738) は旧教本の内容を補足するために、『二十僧伽考究・有縁者入門』(*Dge 'dun nyi shu'i mtha' dpyod skal bzang 'jug ngogs*) を著している。

静慮・無色定については、ジャムヤンシェーパ自身が完全な形で教本を著している。「静慮無色定大論」(*bsam gzugs chen mo*) と通称されるその教本は、四静慮・四無色定に関する議論だけでなく、止観についての詳細な論考を含む大きな作品である。静慮・無色定の課程においては、クンチョク・ジクメ・ワンポによって著された略本、通称「静慮無色定小論」(*bsam gzugs chung ba*) が教材として使用される²¹。

アーラヤ識の課程は、ツォンカパの『染汚意・アーラヤ識の難所広釈』(*Yid dang kun gzhi'i dka gnad rgya cher 'grel ba*)²² に対する註釈書であるクンタン・テンペードウンメの『智者入門』が教本として用いられる。

十二支縁起については、ジャムヤンシェーパによる未完の教本『縁起考究・聖言と論理の宝蔵・智者を喜ばせる美しい蔓』(*Rten brel gyi mtha' dpyod lung dang rigs pa'i gter mdzod blo gsal dga' ba bskyes pa'i phreng mdzes*) が存在するが、この作品は十二支縁起の「無明」と「行」の項目のみを論ずるものである。十二支縁起の課程の教材としてはクンタン・テンペードウンメの『聖言と論理の蔵』が使用される。

5 結語

以上、ラブラン僧院の般若学研究の成立とその実態、特にジャムヤンシェーパによって著作された『般若波羅蜜多考究』(*Phar phyin mtha' dpyod*) の成立とその関連文献について概論を述べた。全八章からなる『般若波羅蜜多考究』の各章の成立年については諸説あり、さらに検討の余地があると思われる。また、ジャムヤンシェーパの教本と旧教本との関連についても、さらなる調査が必要であろう。

今後は『般若波羅蜜多考究』第一章の「法輪」(*chos 'khor*) に着目して、ジャムヤンシェーパの経典解釈論を考察する予定である。クンタン・テンペードウンメやハルハ・チューゼ・ラマによって書かれた割註を参照することにより、ラブラン僧院の般若学研究の特色とその展開の一端が明らかになると期待される。

参考文献

(1) チベット文献

Kun mkhyen rnam thar Mkhas shing grub pa'i dbang phyug kun mkhyen 'jam dbyngs bzhad pa'i rdo rje'i rnam par thar ba ngo mtshar skal bzang 'jug ngogs (Dkon mchog 'jigs med dbang po). Lanzhou: Kan su'u mi

²¹青原 2017: 36–38 を参照。

²²ツルティム・小谷 1986 を参照。

rigs dpe skrun khang. 1987.

Skal bzang mig 'byed *Phar phyin gyi mtha' dpyod bsam 'phel yid bzhin nor bu'i 'phreng mdzes skal bzang mig 'byed* ('Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus): Bkra shis 'khyil ed. Nya.

Sgo mang chos 'byung *Chos sde chen po dpal ldan 'bras spung bkra shis sgo mang grwa tshang gi chos 'byung chos dung g-yas su 'khyil ba'i sgra dbyangs* (Bstan pa bstan 'dzin). Mundgod: Drepung Gomang Library. 2003.

Deb ther sngon po *Bod gangs can yul du chos dang chos smra ji ltar byung ba'i rim pa bstan pa'i deb ther sngon po* ('Gos lo gzhon nu dpal). Chengdu: Si khron mi rigs dpe skrun khang. 1984.

Mdo smad chos 'byung *Yul mdo smad kyi ljongs su thub bstan rin po che ji ltar dar bai tshul gsal bar brjod pa deb ther rgya mtsho* (Brag dgon pa dkon mchog bstan pa rab rgyas). Lanzhou: Kan su'u mi rigs dpe skrun khang. 1982.

Rnam thar snying bsdus 'Jam dbyangs bzhad pa'i rnam thar snying bsdus (Ngag dbang dge legs). In *Collected Writings of 'Jam-dbyangs-bzhad-pa'i-rdo-rje*, vol. 1. Reprinted by Ngawang gelek demo. New Delhi: Gedan Sungrab Minyam Gyunphel Series. 1972–74.

Bla brang dgon pa'i lo rgyus mdor bsdus *Bla brang dgon pa dga' ldan bshad sgrub dar rgyas bkra shis g-yas su 'khyil ba'i gling gi lo rgyus mdor bsdus* (Dge 'dun). Lanzhou: Bsang chu rdzong u yon lhan khang. 1999.

(2) 英文資料

Dreyfus, Georges B. J.

2003 *The Sounds of Two Hands Clapping: The Education of a Tibetan Buddhist Monk*. Berkeley: University of California Press.

Yi, Jongbok

2016 "The History of Monastic Textbooks in Gomang Monastic College (I): 15th Century to 17th Century." In: *Chimokaja: Histories of China, Mongolia, Korea and Japan*, vol. 2, eds. Bruce E. Jr. Bechtol, Frank Jacob, Klaus Hentschel, Jang Hoon Kim, and Choo Chin Low, 23–46. Createspace Independent Publishing Platform.

(3) 和文資料

青原彰子

2017 『静慮無色定大論』止観問答の研究（広島大学提出学位請求論文）

小野田俊蔵

1989 「チベットの学問寺」『岩波講座東洋思想 第11巻 チベット仏教』（pp. 350–394）岩波書店

ツルティム・ケサン（著）、新井慧誉（訳）

1979 『チベットの学問仏教』（寿徳寺文庫2）山喜房佛書林

ツルティム・ケサン、小谷信千代

1989 『アーラヤ識とマナ識の研究：クンシ・カンテル』文栄堂

西沢史仁

2011 「チベット仏教論理学の形成と展開——認識手段論の歴史の変遷を中心として——」（東京大学提出学位請求論文）

（ツェホージャ、広島大学 [インド哲学]）

Prajñāpāramitā Studies at Bla brang Monastery

TSHE DPAL RGYAL

The present paper examines *prajñāpāramitā* studies at Bla brang Monastery, founded by 'Jam dbyangs bzhad pa ngag dbang brtson 'grus (1648–1721/22) in eastern Tibet, on the basis of the *Bla brang dgon pa'i gdan rabs*, *Mdo smad chos 'byung*, and other related materials. 'Jam dbyangs bzhad pa is the founder of Bla brang Monastery. He is also the writer of the monastic textbooks (*yig cha*) of the monastery. At the age of twenty-one to sixty-two, he studied at 'Bras spungs sgo mang Monastery in central Tibet. From the age of fifty-three to sixty-one, he composed the monastic textbook on *prajñāpāramitā*, *Phar phyin gyi mtha' dpyod*, which has been used up to the present as a teaching manual for those studying the *Abhisamayālaṅkāra* and its related literature both at 'Bras spungs sgo mang and Bla brang. This paper thus highlights the monastic curriculum at Bla brang Monastery, the historical events surrounding 'Jam dbyangs bzhad pa's composition of the *Phar phyin gyi mtha' dpyod*, and commentarial works on the *Phar phyin mtha' dpyod* written by later scholars.